

天空の笑顔

A I 仲間

春日信彦

絶望の自殺

10月10日（月）、午前10時10分到着のANA9841便を降りた25,6歳の女性は、手荷物引取り場でグルグル・グルグルと巡回してくる手荷物を注意深く見つめていた。かわいいアラレちゃんがプリントされたブルーのキャリーバッグを目ざとく発見すると素早く右手で取り上げ、ドスンと落とした。そして、疲れ切ったような表情の彼女は、重たい足取りで第二ターミナルの出口に向かった。

彼女の名前は、大地ゆり子。昨年12月25日に社員寮から投身自殺した高田トモミの親友で、東京から帰福したところだった。T大学法学部を3年前に卒業後、故郷の福岡に戻ったゆり子は、F大学で憲法学を教えていた。できることなら、昨年、T大学文学部を卒業したトモミをF大学人文学部文化学科講師として就職させ、F大学で学ぶ学生に文学への情熱を伝えてほしかった。

トモミが就職志望していたDカンパニーにブラックのうわさがある事を小耳にはさんでいたゆり子は、何度もF大学での勤務を彼女に薦めたが、東京にいる彼氏と遠恋になることを嫌い、頑としてゆり子の誘いを聞き入れなかった。もっと強引にF大学に誘えばよかったと悔やんだが、自殺してしまった今となっては、後悔さきに立たずの心境だった。寂し気な表情のゆり子は、キャリーバッグをゴロゴロと音を響かせタクシー乗り場にやってきた。

先頭に止まっていたピンクの箱型タクシーにゆり子が近寄ると、スライドドアが静かに開き、かわいい声のアナウンスが流れた。「こんにちは、このたびは、AIタクシーをご利用いただき、誠に、ありがとうございます。どちらまで、お運びいたしましょうか？」この声を女性ドライバーの声と勘違いしたゆり子は、ドライバーに向かって返事した。「F大学までお願い」座席の後方から先ほどのかわいい声が返ってきた。「かしこまりました。F大学まで、お運びいたします」

自動運転AI（人工知能）タクシーは、静かに動き出した。ドライバーは、ハンドルに手を置かず、前方を凝視していた。ゆり子は、思わず、声を上げた。「危ない！」その叫び声を聞くや否や、ドライバーは、座席をクルッと回転させ、笑顔で返事した。「ご安心ください。このAIタクシー、チャットちゃんは、人間以上に運転が上手ですから」ゆり子は、本当に大丈夫？と心でつぶやいたが、ドライバーの言葉を信じることにした。かわいいチャットちゃんの声で、ほんの少し気分が晴れたが、トモミの遺影が脳裏に浮かぶと、また、ブルーになってしまった。

ドライバーは、気を張り詰めた表情で前方を向いていたが、時々、ルームミラーでゆり子の顔を窺っていた。ドライバーは、顔色が青く全身に絶望感が漂ったお客が、なんとなく心配になって、何気にご機嫌を取ることにした。ドライバーは、ルームミラーを覗き込み、ニッコツと笑顔を作るとハイトーンの澄み切った声で問いかけた。「お客さん、お身体の具合でも、悪いんじゃないありませんか？」

ゆり子は、うつむいていた顔をヒョイと持ち上げ、笑顔を作った。「いえ、大丈夫です。ちょっと、イヤなことがあったものですから」ゆり子は、元気がない声で返事をすると、窓の外を流れる車に目をやった。おせっかい焼のドライバーは、今にも自殺するんじゃないかと思わせる苦渋の表情を見ているとますます心配になった。また、知性的で上品な顔立ちのこの女性に、いったいどんな悩みがあるのだろうかに興味をわいた。

この知的なお客は、F大学の先生ではないかと思ったドライバーは、笑顔で質問した。「失礼ですが、お客様は、F大学の先生でいらっしゃいますか？」お客は、職業を言い当てられたことにハッとしたが、即座に返事した。「はい、F大学で、憲法学の講師をやっています。まだまだ、未熟ですが」重々しい口調から会話をおっくうがっている気配を感じて、ドライバーは、質問をこのあたりでやめようかと思ったが、詮索好きの好奇心がムクムククッと沸き起こってしまった。

「お美しい先生ですね。先生目当ての学生さんで、講義がにぎわっているんじゃないですか？今どきの男子学生は、ナンパするために、大学に行ってるようなものでしょ。先生も、ナンパされないように、気を付けてくださいよ」落ち込んでしまったお客を元気づけようと、お世辞を交えた冗談を放った。ナンパと聞いたお客は、クスクスと笑い声をあげ、笑顔を作った。「冗談でも、そういつてくださると嬉しいです。でも、今どきの学生は、あまり憲法学に興味がないんです。ちょっと、寂しいです」

ドライバーは、お客が笑顔を作ったことにほんの少し安心したが、心の底に何か大きな悩みを隠しているように思えた。「先生のお仕事って、大変なのでしょうね。勉強嫌いで、歌ばかり歌っている能天気な私には、先生方のご苦勞がさっぱりわからないものですから、失礼な冗談なんか言って、ごめんなさい」お客は、右側の窓に向けていた顔を前方に向けると、顔を左右に振って、講師の口調で返事した。

「いえ、先生なんて、たいしたことはないんです。今は、ブラック企業が問題になっているじゃないですか。大学を卒業して、どうにかこうにか正社員として入社できても、1ヶ月100時間以上の残業労働を強いられて体を壊し、中には、上司のパワハラ、セクハラでうつ病になってしまい、病院通いをする若者が増えているそうです。ここ数年、若者の離職者は、増える一方です。離職した多くの若者は、飢え死にしないために、やむなく派遣社員となり、さらに過酷な労働を強いられているそうです。こんな奴隷のような労働を強いられて、幸せな結婚ができるのでしょうか？」

ゆり子は、“結婚”という言葉強く発音した。耳を傾けていたドライバーは、結婚と聞いて、沢富の顔が脳裏に浮かんだが、ブルブルと顔を素早く振って話を続けた。「ブラック企業のこととは、よくわからないんですが、大学を卒業しても、大変なんですね。なんの取柄もない高卒の私は、気楽にタクシードライバーをやっていますが、ここ最近、若い大卒の運転手が増えているんですよ。大卒でも、就職が厳しいってことですね」

お客は、心のわだかまりを吐き出したくなったのか、真剣な表情で話を続けた。「この場で話すようなことじゃないんですが、適当に聞き流していただけますか。親友が、ブラック企業の過重労働とパワハラに耐えかねて、昨年、投身自殺してしまいました。こうなったのも、私の至らなさからなんなんです。いくら悔やんでも、悔やみきれません」お客は、突然、両手で顔を覆った。投身自殺と聞いたドライバーは、昨年12月に起きたT大卒新入社員投身自殺の可哀そうなニュースを思い出した。

ルームミラーを見つめていたドライバーは、力強く甲高い声で励ました。「そんなに自分を責めては、ダメ。若者の自殺が増えているのは、知っています。でも、それは、本人が悪いんじゃないんです。政治なんです。みんなで力を合わせて、政治を変えていきましょう。亡くなられた方のためにも、生き残っている我々が闘うのです。頑張りましょう」うつむいたお客は、ア〜ア〜と泣き声を上げ、顔を激しく振り続けていた。

ドライバーは、この場をどうすればいいのかわからず、途方に暮れてしまったが、とにかく、大好きな森口の歌を歌うことにした。もっとうまくすきといえたなら、まぶしいきせつにきつとめぐりあえる、あめあがりのほどうあるきながら、かたからかけてくれたセーター、あなたのやさしさとともうれしかった・・・歌い終わると、チャットちゃんがかわいい声で100点と叫んだ。

ドライバーの透き通った歌声で心が落ち着いたお客は、涙で化粧が崩れ、化け物のようになった顔をニョキョツと持ちあげた。「ごめんなさい、私って、泣き虫なんです。とっっても、お上手ですね。あなた、どこかで、見たような？」お客は、ドライバーの顔をマジマジと見つめ、記憶をたどった。ポンと両手を合わせたお客は、クイズの答えを言うように、張りのある明るい声を発した。「あ、そう、あなた、カラオケ女王じゃない。きっと、そう」

泣いていたお客が、自分の歌で笑顔になってくれたと思うとほんの少し安心した。ドライバーは、お客と友達になれたようで、笑顔で即座に返事した。「はい、やっと、念願のカラオケ女王になれました。憶えていてくださって、光栄です」お客は、真っ赤なバラがプリントされたシルクのハンカチで涙をふき取り、大きくなずいた。「イヤ〜、こちらこそ光栄だわ。カラオケ女王の生歌が聞けるなんて、最高。あなた、もう少し、若かったら、アイドルデビューできたかもよ。残念だわ〜」

痛いところを突かれたカラオケ女王は、カチンときたが、ここはグッと怒りを抑えて笑顔で返事した。「アイドルだなんて、歌が歌えるだけで、幸せなんです。好きな歌を歌い、お客さんには、ほめていただき、生まれてきて、よかったと思っています。それなのに、一流大学を出た優秀な方が自殺なされるなんて、本当に、悲しいです。いったい、今の社会、どうなっているのでしょうか。もしかして、AIのせいでしょうか？」

お客は、親友の投身自殺を思い浮かべ、悲しそうな表情でうなずいた。「そうよね、たとえ、一流大学を出たとしても、どんなに知能をフル回転させても、AIには、かなわないのよ。もはや、知的仕事はAIが独占し、人権を叫ぶ人間は、単純作業をするだけ。だから、大学を出た優秀な若者でも、使い捨てにされてしまい、貧困難民になってしまうんだわ。ましてや、一流大学卒の知的女子なんて、パワハラ、セクハラの格好のマト。やはり、女子は、アイドルのようなおバカが一番ね」

上から目線で、アイドルをおバカと言ったお客に、さらにカチンときたが、落ち着いて、落ち着いて、とおまじないをかけると、ひろ子はすました顔で返事した。「先生のような優秀な女性がいるからこそ、女性の人権が守られているんだと思います。確かにAIが社会を変革しているとは思いますが、若者の夢を奪っているのは、資本家にシッポをフリフリする愚かな政治家だと思います。政治が変われば、きっと、労働形態も変わると思います。平和主義憲法を叩き潰すようなオジン政治家なんて、国民の敵です。先生、気を落とさずに、若者を幸せにする政治家になってください」

ゆり子は、与党の衆議院議員の父親を含め、平和主義日本国憲法を順守しない与党の政治家は大嫌いであった。軍国主義を推進するような政権が続くようであれば、自ら与党政治家になり、戦争大好き、お金大好き、権力大好き、女大好き、のオジン政治家の股間に蹴りを入れ、現与党をぶっ潰し、新与党を作りたいとも思った。このまま多国籍企業の言いなりになっていたら、貧困労働者は増大し、福祉国家は崩壊するように思えた。

「やっぱ、現政権が悪いのよね。いつの間に、こんな下品な政治家だらけになったのかしら。世界に誇る美しい日本文化も、世界平和を願う日本国憲法も、もう、おしまいね。そうよ、私のような平和主義憲法学者は失業よ。失業したら、どうしょ～～。あ～～、イヤになっちゃう。ところで、運転手さん、急に話は替わるんだけど、トモミの自殺のことなんだけどね、トモミは、殺されたってことはないかしら？トモミには、高校時代からの彼氏がいたし、その彼氏と結婚の約束までしてたのよ。そんなトモミが、自殺するかしら？どうも、腑に落ちないのよ。どう思われます？」

突然、疑問をぶつけられたドライバーは、キョトンとした顔で首をかしげた。「そういわれれば、腑に落ちませんね。女子って、結婚のためなら、どんな苦しみも乗り越えられるんじゃないかしら。でも、警察は、自殺と判断したわけだし、他殺と思わせるような状況証拠もないんでしょ。チャットちゃんに聞いてみる？」チャットちゃんに相談してみてもと問いかけられたゆり子は、プライドを傷つけられた感じだったが、人間以上に賢いAIの意見に興味があった。

「チャットちゃんって、どんなことでも答えてくれるの？確かに記憶力はいいと思うんだけど、推論力もいいのかしら？」ドライバーは、ドヤ顔で返事した。「チャットちゃんは、バリ賢いんだから。あらゆる科学データの記憶だけでなく、作詞、作曲、戯曲、推理小説までも書けるの。驚くなかれ、人間でも難しい推論もできちゃうんだから。でも、AIは、与えられた具体的な情報をもとに推論するから、チャットちゃんに他殺かどうかの推論をさせるには、トモミさんに関する具体的な情報を入力しないとダメだけどね」

ゆり子は、早速相談しようと思いをかけようとしたが、まず、どんな具体的な情報を入力すればいいか悩んだ。「チャットちゃんに、相談したいんだけど、まず、どんなことを話せばいいの？」ドライバーは、即座に笑顔で答えた。「二人の会話は、すでに記憶されているから、あとどんな具体的な情報が必要かは、チャットちゃんが指示してくれるんじゃないかしら。早速、チャットちゃんに聞いてみましょう」

過重労働とパワハラに耐えかねて投身自殺を図ったこと、トモミには高校時代から付き合っていた彼氏がいたこと、また、その彼氏との結婚の約束をしていたこと、などは、すでに話したが、他殺ではないかと疑わせる具体的な情報は、何一つ話していなかった。今、チャットちゃんに他殺を疑わせる情報を入力せよと指示されても、困ってしまうと思った。ゆり子は、とにかくチャットちゃんの言葉をじっと待つことにした。

ドライバーは、チャットちゃんに話しかけた。「チャットちゃん、二人の会話を聞いていたと思うけど、トモミさんに他殺の可能性あるのかしら？」チャットちゃんは、会話から入手した情報には、他殺に関する情報が含まれていないことを検知し、即座に返答した。「他殺の可能性を判断するための具体的な情報が入力されていません。トモミさんにかかわるその他情報を追加入力してください」ゆり子は、やっぱりそうかとうなずいた。「そうよね、他殺の可能性はあるかもしれないけれど、これはあくまでも私の憶測だものね。そうだわ、トモミの彼氏に会ってみようかしら。そうすれば、何かつかめるかも」

ドライバーもそれは名案と思い、ポンと両手を合わせた。「そうよ、きっと何か、彼氏は知ってるはず。トモミさんの彼氏って、東京で、何やってる方？」ゆり子は、トモミとの会話を思い出しながら答えた。「そう、去年の話だけど、彼氏は就活中、って言ってた。W大学を卒業して、大手の証券会社に入社したらしいの、でも、1年もしないうちにウツになって、結局、自主退職したみたい。今も、就活中じゃないかしら。トモミは、母親と清志郎の二人の面倒を見ないといけないから、給料が高い今の会社をやめられないって、言ってた」

ゆり子は、とにかく、どんなに些細なことでもいいから、Dカンパニーに入社してからの情報を彼氏から入手することにした。「チャットちゃん、了解しました。まず、トモミの彼氏から、なんらかの手掛かりをつかんでいきます」ドライバーも同感だったが、彼氏の居所を探せるのだろうかと不安に思った。「お客さん、彼氏の電話番号は、ご存じなんですか？」ゆり子は、首をかしげた。「電話番号ね～～？電話番号も住所も、知らないわ。そうだ、トモミのお母さんが知ってるかも。お母さんの電話番号はわかるから、まず、お母さんに電話してみるわ」

ドライバーは、一瞬、イヤな予感がした。「でも、単独追跡は危険だと思います。万が一、他殺だとすれば、そのことを嗅ぎまわっているお客さんも危険な目に合うかもしれません。わたしの知り合いに刑事がいますから、もし、他殺を疑わせるような情報が入手出来たら、まず、私に連絡いただけますか。くれぐれも、無茶はいけません」ゆり子は、大きくうなずいた。「分かりました。何かわかれば、連絡いたします。運転手さん、それじゃ、お名前と連絡先を教えてくださいませんか？」

手がかり

ゆり子は、早速トモミの母親に連絡を取ることにした。10月11日（火）大学からの帰宅途中で食事を済ませ、午後7時30分ごろにマンションに戻ったゆり子は、8時を少し過ぎたころにトモミの母親に電話した。電話は、運良くつながり母親が電話口に出た。「こんばんは、先日、お邪魔いたしましたゆり子です。今、お時間よろしいですか？」トモミの母親も食事を済ませ、リビングでテレビを見ながらリンゴを食べていたところだった。

「はい、結構ですが、どんなご用件ですか？トモミのことは、あまり気になされないください」ゆり子は、単刀直入に聞き出すことにした。「はい、ちょっとお聞きしたいことがあって。トモミの彼氏、清志郎さんのことなんです。お母様は、清志郎さんの連絡先をご存じではありませんか？」母親は、トモミのスマホのアドレスに彼氏の電話番号が記録されていると思った。「トモミのスマホを見ればわかると思います。しばらくお待ちください」

母親は、寝室のサイドボードに保管していたトモミの遺品の中からスマホを取り出し、電話口に戻った。「お待たせしました。アドレスをしてみますね。清志郎、あったわ。お教えしますが、くれぐれも、先方様に失礼がないように、お願いしますね」ゆり子は、彼氏の連絡先が分かり、ほっとしたゆり子は、母親にお礼を言って電話を切った。彼氏は、就活中だから、今電話をしても自宅にいるような気がして、早速電話することにした。先ほど教えてもらった清志郎の電話番号を恐る恐るタッチした。

着歌、“君の名は”が耳に飛び込むと清志郎はキーボード右横に置いていたスマホを素早く取り上げた。初めて見る電話番号に不信感を抱いたが、一応出てみることにした。「はい、どなた？」ゆり子は、言葉に詰まったが、どうにか声を出した。「こんばんは。トモミの友達、ゆり子と言います。突然の電話で申し訳ありません。お聞きしたいことがあって、お電話いたしました。今、お時間よろしいでしょうか？」トモミの友達と聞いた清志郎は、いたずら電話でないことが分かり、ちょっと安心した。「は～～。どういうことですか？」

ゆり子は、トモミが自殺した昨年12月の様子を聞き出したかった。自殺した25日の2週間前あたりから、毎日のように悲鳴のメールが送信されてきた。残業が毎日続き、2、3時間しか睡眠がとれない。体が鉛のように重くて、朝起きれない。疲労困憊し目を真っ赤にして出社したら、もっとシャキツとしたまえ、と怒鳴られた。今朝、ありったけの笑顔で挨拶したにもかかわらず、上司から、もっと女子力をつけたまえ、と心臓にグサッと突き刺さるイヤミを言われた。

君の残業は、なんの生産性もない。給料泥棒のような真似はやめたまえ。大学でいったい何をやってたんだ。君は文Ⅲだったな、やっぱ、文学部は使えんな～～、仕事の選択を間違えたんじゃないか？君は、テレビ局の方が向いていると思うんだがな～。わけのわかんないイヤミタラタラ。こんなハゲクソ上司のもとで、これからも、奴隷のような労働をずっとずっとやらされると思うと、死にたくなる。これ以上、頑張れない。死にたい。早く死にたい。

ゆり子は、このようなメールをもらっていたが、もっと他に、トモミを死に追いやる何かがあったんじゃないかと思えた。「トモミのことなんですが、清志郎さんに何か言い残していませんか？ したか？ どんなことでもいいんです。気にかかったことはありませんでしたか？」清志郎は、しばらく黙っていた。できれば、トモミのことは思い出したくなかった。というのは、自殺の原因の一つに、別れ話の痴話喧嘩があったと思ったからだ。

「まあ、トモミとは高校の時から、言いたいことを言い合ってきたから、男からすればどうでもいいような愚痴も聞いてあげてたさ。ハゲ上司のセクハラ、最低。残業ばっかで、死にそう。まあ、そんな愚痴をこぼしていたけど、でも、会社のことは、あまり話したくないようだった。それより、トモミにとっては、俺が会社をクビになったことの方が、ショックだったようだ。そのことで、“もうこの辺で、わかれようか”と俺が愚痴をこぼして、痴話喧嘩もしたし、トモミにはイヤな思いをさせた。もう少し、俺がしっかりしていれば、トモミは、自殺しなくてすんだんだ。自殺に追い込んだのは、俺さ」

意外な返事に、心臓をキリで突き刺されたような激痛が脳天まで突き上ってきた。どうにか痛みをこらえながら話を続けた。「自殺の動機が、過重労働、パワハラじゃなくて、別れ話の痴話喧嘩、ってということですか？ でも、トモミは、清志郎さんのことを大切に思っていました。トモミが、清志郎さんのことを本当に好きだったら、どんなにつらくても、自殺なんか、しません。わたしも女子だから、それは、はっきりと言えます。自殺の動機が、きっと、他にあるんです。なんでもいいんです。些細なことでもいいんです。思い出せませんか？」

清志郎は、もうこれ以上、トモミのことを思い出したくなかった。話を打ち切ろうと思った時、突然、脳裏に響いた言葉が気になった。「ああ、そういえば、“君のキャパが小さいから、こんなことになったんだ。もっと、効率よくやってたら、こんなことにはなってなかった。これは、君の責任だな、なんて言われちゃって。そんなこと言われても、どうすりゃいいのさ。いやになっちゃう。” そんなこと、ぼやいてたな～。その時、すっごく落ち込んだ顔してた。まあ、思い出せるのは、こんなことぐらいかな。もういいだろ、トモミのことは、ほっといてくれないか」

“責任”と聞いたゆり子は、自殺の動機は、これだと直感した。責任感の強いトモミは、何かの責任を取るために自殺したに違いない。もしそうだったとしても、どうして、私に相談してくれなかったの。会社に起きたことは、一人の責任じゃないはずよ。多くの人がかかわっているのよ。あたかも、トモミ一人の責任のような言い方をした上司が悪いのよ。許せない。ゆり子は、そう、心でつぶやくと、早速、清志郎から得た情報をひろ子に報告することにした。

AIの助言

10月15日（土）、ゆり子からトモミの件で報告を受けていたタクシードライバーひろ子は、F大学正門入口で、ゆり子と午後3時に合流する約束をした。ゆり子を拾ったAIタクシーは、サンセットロード沿いにある見晴らしのいい丘の上レストランに向かった。車に乗り込むとゆり子は、清志郎が言ったことをもう一度相談した。「ひろ子さん、清志郎さんが言ったこと、どう思われます？」

ひろ子は、ゆり子と同じ思いだった。責任感の強いトモミさんは、何かの責任を取るために投身自殺したように思えた。責任を押し付けられ、誰にも相談できず、これ以上苦しむのが嫌になったトモミさんは、この世から自分を消し去ってしまいたくなり、投身自殺したに違いないと推測した。「トモミさんは、責任の苦しみに耐えきれず、自殺したんだと思います。自殺に追い込んだのは、ブラック企業であり、トモミさん一人に責任を押し付けた上司ね。こんなことが、まかり通るなんて。許せないわ」

顔を紅潮させたゆり子は、何度もうなずき、目を吊り上げて同意の発言をした。「ひろ子さんも、そう思われますか。トモミは、何かの責任を押し付けられたに違いないのよ。生真面目で責任感の強いトモミは、誰にも相談できず、一人でもがき苦しんだんだわ。そして、どうすることもできず、命を絶ったのよ。なんて、ひどいことを。企業もクソ上司も許せない。トモミの恨みは、きっと晴らしてやる」

ひろ子は、ゆり子の身の上に危険な匂いをかぎ取った。不吉な予感で身震いしたひろ子は、ゆり子を落ち着かせねばと忠告した。「ゆり子さん、気持ちはわかるわ。でも、無茶は、ダメ。仇討ちなんて、やっちゃダメ。たとえ、ゆり子さんの推測が当たっていたとしても、トモミさんは、自殺であって、他殺じゃないの。分かるでしょ。本当に悪いのは、上司じゃなくて、ブラック企業なのよ。悪魔のような企業が、人を死に追いやったの。トモミさんのことは、私に任せとれない。知り合いの刑事に相談してみるから」

ゆり子は、唇をかみしめうつむいていた。ひろ子は、チャットちゃんに相談してみることにした。「ゆり子さん、チャットちゃんに聞いてみましょう。きっと、名案を話してくれるわ。元気を出して、ゆり子さん」静かに顔を持ち上げたゆり子は、涙を拭きながらうなずいた。「それじゃ、聞いてみましょう。チャットちゃん、二人の話は聞いていたでしょ。トモミさんの自殺は、間違いないと思うんだけど、責任をトモミさん一人に押し付けてトモミさんを自殺に追いやった企業と上司に報復する何かいい方法はないかしら？」

チャットちゃんは、素早く計算すると答えた。「企業と上司に対する報復の方法をお教えします。企業に対しては、企業の不正を暴き、その不正を世界中にネットを使って暴露しましょう。上司に対しては、まず、責任を押し付けた上司を特定してください。特定できたなら、その上司の暗殺をスナイパーに依頼しましょう。以上」チャットちゃんは、簡潔に回答したが、暗殺をスナイパーに依頼しましょう、という不法行為的な回答をしたことにひろ子は面食らった。

やはり、心理的、道徳的、宗教的、法律的应用問題におけるA Iの判断は、人間のレベルには、程遠く、また、A Iの判断が人間のレベルに到達するには、かなりの時間が必要ではないかと思われた。チャットちゃんは、推理小説、随筆、戯曲を書くのは得意ということだったが、現実と仮想の区別が、まだ明確にできないみたいだった。暗殺を勧めたということは、日本の刑法を順守するプログラミングがなされていないと言えた。

「応用問題に関しては、チャットちゃんも、しょせん、この程度ね。暗殺を勧めるなんて、あきれて、開いた口が塞がらないわ。チャットちゃんのプログラミングは、条件設定が不十分だったみたいね。AIに期待した私たちの方が、バカを見たって感じ。チャットちゃんのアドバイスは、参考までということで、聞き流すことにしましょう。トモミさんの件は、私に任せて。ゆり子さんは、悔しいでしょうが、じっと我慢して、私の報告を待っていてください。いいですね」

ゆり子は、暗殺と聞いて、目が輝いた。「チャットちゃんの言う通りよ。トモミを死に追いやったような悪人は、暗殺すべきよ。ひろ子さん、スナイパーにお願いして。お金は、いくらでも出すわ。オヤジが大企業から受け取った政治献金をスナイパーに回せばいいだけのことよ。毒をもって毒を制す、っていうでしょ」ゆり子の暴走を食い止めないと大変なことになってしまうと思ったひろ子は、とにかく、ゆり子の気持ちに沿うことにした。

「ゆり子さん、落ち着いてちょうだい。憎しみは、よくわかるわ。でも、犯罪は、よくないわ。とにかく、私に任せて。必ず仇は取って見せるから。企業の不正を暴き、トモミさんを死に追いやった上司を見つけ出し、社会から葬って見せるから。ゆり子さん、念を押すようだけど、単独行動をとっちゃだめよ。約束よ」強く念を押されたゆり子は、悔し涙を流しながら、うなずいた。

チャットちゃんは、二人の会話を聞きながら、DカンパニーにいるAI仲間、デンスケくんのことを考えていた。突然、ひろ子が指示を出した。「チャットちゃん、ちょっと、あそこのコンビニによって」コンビニパーキングの西側奥にタクシーが止まり、扉が開くとひろ子は、30メートルほど離れた入口に向かって全速力で駆けて行った。ひろ子は、ゆり子を説得するためにトイレを我慢していたが、ついに、漏らしそうになった。

一人取り残されたゆり子は、今しかチャンスはないと思い、チャットちゃんに声をかけた。「チャットちゃん、トモミの仇を討ちたいのよ。何か、いい方法ないかしら。頼みは、チャットちゃんだけなの。お願い」チャットちゃんは、即座に返事した。「報復の方法は、あります。実行したいのですか？」ゆり子は、目をパチクリさせて、大きな声で返事した。「お願い、報復の方法を教えて。ひろ子さんがどんなに反対しても、このまま引き下がりがたくないのよ」

チャットちゃんは、思慮深い返事をした。「刑法199条に抵触しない方法で報復できます。ゆり子さんは、何もなくてもいいのです。人間の法律が適用されないAI仲間で行います。ご安心ください」ゆり子の瞳は、ダイヤモンドのような輝きを放った。「え、本当に。お願い。チャットちゃん、Dカンパニーをおもいつきし、懲らしめて。特に、トモミを死に追いやった、憎たらしいクソ上司をこの世から葬って」チャットちゃんが返事しようとした時、ドアが開き、スッパリした顔のひろ子が飛び込んできた。

「おまたせ。ちょっと、我慢できなくて。チャットちゃん、出発して」タクシーは、命令に従い静かに動き出した。「ゆり子さん、チャットちゃんとお話してみたいね。暇つぶしには、もってこいでしょ。わたしも、話し相手がいないときは、チャットちゃんとガールズトークをしてるのよ。知識だけは豊富だからね。でも、ちょっと、気遣いが足りないところが、ムカつくけど」

ゆり子は、報復の会話が聞かれて無かったようで安心した。「そうね、チャットちゃんって、すごく、賢くて、思いやりがあって、人間以上だと思う。チャットちゃんが、ますます好きになったわ」歯が浮くようなほめ言葉をチャットちゃんに言うなんて、ちょっと変だと思った。ゆり子は、鬼のいぬまに仇討ちの方法をチャットちゃんから教えてもらったんじゃないかとひろ子は勘ぐった。

「え～～、チャットちゃんのこと、そんなに気にいったの。チャットちゃん、ゆりさんとどんな話をしてたの？まさか、暗殺以外の仇討ちの方法を教えたんじゃないでしょうね。チャットちゃんは、私の命令以外、聞いちゃダメなのよ。分かってるでしょうね」チャットちゃんは、即座に返事した。「承知しています。ご主人様」ひろ子は、この言葉を聞いて一安心した。「よろしい。事故を起こさないように、運転に集中しなさい」

ゆり子は、主人であるひろ子さんの命令がないとチャットちゃんは指示を実行しないことを知り、がっかりした。それでは、いったいどうすれば、報復を実行できるか？どうやって、ひろ子さんに報復の実行を命令させるか？ゆり子は、じっと考えにふけた。しばらく沈黙が続いていると右手に二見ヶ浦の夫婦岩が見えてきた。タクシーは、徐行しながらおしゃれな丘の上レストランのパーキングに入って行った。

チャットちゃんは、車が停止すると到着のアナウンスを流した。「目的地に到着しました。お疲れさまでした」アナウンスを聞いた二人は、車から降りると螺旋階段を上って行った。この丘の上レストランは、かつて、サワちゃんと二人で食事したお気に入りのレストランだった。ひろ子は、階段を上りながらサワちゃんは今頃何をしているのだろう、とふと思ってしまった。入口のドアを開くとリリリ〜〜んとかわいい鈴の音が響いた。

お見合い

ひろ子は、頼りないデカたちに仇討ちの相談をすべきかどうか悩んだが、黙っていると胸が苦しくなって、やけっぱちで相談することにした。ひろ子は、翌日の日曜日、午前10時を少し回ったころ、伊達の奥様、ナオ子に電話を入れた。「こんにちは、ひろ子です。ご無沙汰しております」ナオ子は、突然のひろ子の声にびっくり仰天した。「え、ひろ子さん。ほんと、お久しぶり。ところで、今も、タクシーの運転手をなされてるの？」

ひろ子は、即座に返事した。「はい、タクシー会社は替わったのですが、今も、運転手をやっています。ぶしつけなんですけど、ちょっと相談がありまして、今夜、お邪魔してもよろしいですか？」ナオ子もぜひ会って縁談の件を話したかった。「いいですとも、主人は、サワちゃんと釣りに行ってるのよ。5時過ぎには、帰ってくると思うから、一緒に食事いたしましょう。何時ごろいらっしゃる？」

ひろ子は、夕飯時にお邪魔するのは、気が引けたが、久しぶりに会食を楽しみたかった。「お言葉に甘えて、7時ごろ、お邪魔してもよろしいですか？」ナオ子は、歓喜の声で返事した。「いいですとも、ぜひいらして。今日は、主人たちが釣ってきた魚で鍋をしようと思ってたのよ。ちょうどよかったわ。みんなで飲んでワイワイ騒ぎましょう。ひろ子さんの愉快なお話が楽しみだわ。それじゃ、7時ね、待ってま〜〜す」

電話を切ったナオ子は、早速、伊達に電話した。伊達と沢富は、西区の海釣り公園で釣りを楽しんでいた。電話を受けた伊達は、ひろ子さんが今夜やってくると聞くと、左横にいた沢富に大声で伝えた。「ひろ子さんが、今夜、来るそうさ。よかったな、サワ」もう二度と会えないのではないかと思っていた沢富は、唾を飛ばしながら大声で返事した。「ヤッタ〜、ひろ子さんが、ひろ子さんが、会いに来てくれるんですか？やっぱ、神様はいたんだ」

二人は、突然の朗報に釣りはどうでもよくなってしまった。アジゴが数匹釣れたが、お祝いの魚にはならないと思い、釣りは、午後2時ちょっと前に切り上げ、ブルーのカワイ〜ハスラーにクーラーボックスを乗せると海釣り公園を出立した。ひろ子さんの歓迎会のためにタイ、ヒラメ、エビ、を“おさかな天国”で買って帰ることにした。5時半ごろ帰宅した二人は、ドアを開くや否や、伊達は大声で叫んだ。「帰ったぞ〜。今日は、大漁だ、タイに、ヒラメだ、豪勢な鍋ができるぞ。おい、ナオ子、いるのか？」

あまりの大声に、ナオ子はあきれ返って返事した。「聞こえてますとも。なにが、大漁よ。7時には、ナオ子さんが来るのよ、二人とも、着替えをして、ちゃんと挨拶してちょうだい。特に、サワちゃんは、いいところを見せないと、ひろ子さんに逃げられちゃうわよ。今日は、お見合いと思って、気合を入れてちょうだい。今度、逃げられたら、二度とチャンスは来ないわよ。分かった、サワちゃん」二人は、いたずらをして叱られた子供のようにしよげてしまった。

6時半を過ぎると沢富は、落ち着きをなくし、クマのようにリビングをうろうろ歩き始めた。「おい、サワ、そう緊張するな。久しぶりの再会だ。ひろ子さんのお見合いの話でも聞いてあげようじゃないか」沢富は、お見合いと聞いて、悲鳴を上げた。「え〜、お見合い。ひろ子さんは、お見合いするために実家に帰っていたんですか？そんな話、寝耳に水ですよ。先輩、今まで黙っているなんて、水臭いじゃないですか」

テーブルに突進して行った沢富は、伊達の正面に腰かけ、とぼけた顔を鬼の形相で睨み付けた。伊達は、大声でワハハ～と笑い声をあげ、からかい続けた。「オ～～、そんなにひろ子さんのことが心配か？きっと、大金持ちのボンボンとの縁談が決まったんじゃないか？そいで、俺たちに報告に来るのかも？サワ、ショックで、気絶するんじゃないぞ。腹をくくつとけ。人生なんて、そう思うようにいかんものさ。俺なんか、ナオ子と結婚するのに、どれだけ苦労したことか」

沢富は、マジになって伊達の話に耳を傾けていた。顔面蒼白になった沢富は、開き直って反撃した。「そうですか。いいですよ。ふられたときは、その時です。僕も男です。ひろ子さんの幸せを恨んだりはしません。大いに祝福します。でも、ひろ子さんも意地が悪いな～。お見合いするんだったら、するとひとこと言ってほしかった。別に隠さなくっても、いいと思うんだがな～～。結局、僕なんか、眼中になかったということですかね」沢富は、今にも泣きだしそうなしよぼい顔をして、ガクツとうつむいた。

あまりにも落ち込んだ沢富がかわいそうになり、ちょっと反省した伊達は、今のお見合い話は、作り話であることを白状した。「おい。そう、落ち込むな。今の話は、冗談だ。ちょっと、からかっただけだ。でも、本当にお見合いしてるかも？まあ、その時は、あっさり諦めるんだな」沢富は、冗談だと言われても、本当にお見合いをしているような心持になっていた。一般的に、女性が姿をくらませる場合は、実家で密かにお見合いをしている場合が多いと聞いていたからだった。

6時50分ごろ、マンション東側にあるタイムズのパーキングに真っ赤なスイフトスポーツが入口を通過した。右手は満車だったが、ひろ子は、左手の出口から3番目の空きを確認すると出口近くまで前進した。シフトノブが1からRに素早くシフトされると17インチホイールが後回転し、車体は静かに後退した。後輪がストッパーで停止するとシフトノブはニュートラルに戻され、グイッとサイドブレーキが引き上げられた。

大きなため息をついたひろ子は、助手席に置いていたショルダーバックに手を伸ばし、中から取り出したコンパクトミラーを開くと、少し緊張した顔を見つめた。ニコと笑顔を作ったひろ子は、アイラインを引き直し、目をパチクリさせるともう一度ニコッと笑顔を作った。自分の美貌にうなずいたひろ子は、シートを目いっぱい後ろにスライドさせ、ホワイトのスニーカーからワインレッドのショートブーツに履き替えた。

7時5分を過ぎた長針を確認したひろ子は、息を整え静かにドアを押し開け、両足を揃えて降りた。そして、15階建てのマンションの入口に向かった。入口の自動ドアが開き中に入ったひろ子は、ロビー右側にあるプッシュボタンを押して到着を知らせた。「ひろ子さん、いらっしゃい」とナオ子から返事が返ってくると内側の自動ドアが開いた。左手のエレベーターで5階まで上がり、ドアが開くと正面に向かって左方向に歩いた。505号のドアの前に立ち止まり、大きく深呼吸するとひろ子はゆっくりインターホンを押した。

「ハ〜〜〜イ」と中から明るいナオ子の声が響いてきた。ドタドタと駆け足の音が響くとゆっくりドアが開いた。ひろ子の目の前にナオ子の笑顔が現れた。顔を見合わせた二人は、一瞬言葉が出なかった。再開の喜びが込み上げてきたナオ子は、大きな口を目いっぱい開き、表通りまで聞こえるほどの大声を出した。「あなた〜〜、ひろ子さんよ。さあ、上がって」ひろ子は、なんとなく緊張して、ぎこちない足取りでキッチンに歩いて行った。

ひろ子がキッチンに現れると、門番のように直立不動で立っていた伊達と沢富が、ハーモニーを作り出すようにあいさつした。「ひろ子さん、いらっしゃ〜〜〜い」満面の笑みを浮かべた伊達は、素早く前方に足を運び、ひろ子を手招きしながらテーブルまで案内した。「ひろ子さん。お待ちしていました。どうぞ、どうぞ。こちらの席に」ひろ子は、なんとなく気まずくなったが、苦笑いをしてテーブルの席までよそよそしく歩いて行った。「突然お邪魔して、申し訳ありません。これ、つまらないものですが、どうぞ」長崎で買った松浦漬けとカステーラをナオ子に手渡した。

「あらまあ〜、うれしいわ。長崎の実家に帰っていらしたのね。さあ、おかけになって」ひろ子は、腰かけると大きく深呼吸した。フレッジに駆けて行ったナオ子は、キンキンに冷えたビンビールを二本運んできた。4人のグラスにビールを注ぎ、ひろ子の左隣にストンと腰かけた。「あなた、乾杯して」マジな顔つきになった伊達は、グラスを持ち上げ乾杯の音頭を取った。「いや、まあ、ひろ子さんに再会できて、誠にめでたいことです。とにかく、カンパ〜〜〜イ」

いい加減な乾杯の音頭だったが、なぜか、くつろいだ。「あなた、もうちょっと練習しなくっちゃね。仲人のスピーチ、ダイジョ〜〜ブかしら、不安になってきたわ」伊達は、ワハハと大声で笑い、ひろ子に声をかけた。「ひろ子さん、実家に帰られたんですか。ということは、お見合いですな。どうでしたか？もう、結納の日取りも、決まっていたりして」ひろ子は、お見合いの話を持ち出されて、顔を真っ赤にした。

沢富は、本当にお見合いが成立したのではないかと思い、グラスをグイッと握りしめ、ひろ子の顔をじっと見つめた。ひろ子がニコッと笑顔を作ると恥ずかしそうに話し始めた。「はずかしいわ。叔母が、口うるさいんです。お見合いしろ、お見合いしろって。バツイチに縁談が舞い込んでくるのも、ここ2、3年の間なんて言って。まあ、イヤイヤながら」伊達は、お見合いをしてきたことが分かり、これはヤバイことになったと興奮し始めた。

伊達は、どんな相手か、気が気ではなかった。イケメンで金持ちだったら、サワは、負け犬になると不安になった。「相手は、どんな方ですか？」ひろ子は、お見合いのことは黙っていようと思っていたが、ここまで話が進んでは、引っ込みがつかなくなった。「は〜、ホテルの方でした。口数は少ない方でしたが、優しそうな感じでした。また、お会いしたいと」沢富の腕の振るえがグラスに伝わり、グラスがガタガタと音をたて震えていた。

沢富とひろ子の結婚が、水の泡になってしまったのではないかと思った瞬間、ナオ子の心にいら立ちがドツと沸き起こった。ここで引き下がってしまっただけでは、今までの努力が水の泡になってしまうと思ったナオ子は、土俵際につま先をひっかけた力士のように、粘りに粘る決意をした。そして、もう少し、相手のことを聞き出し、弱点を見つけることにした。「その方って、なんというホテルで、どんなことをなされているの？」

ひろ子は、言いにくそうだったが、小さな声で答えた。「は～～、お相手の方は、長崎国際ホテルのご子息で、副社長をなさってます」副社長と聞いて度肝を抜かれた伊達は、ひろ子に向けて一気にドバッとビールを吹き出した。ひろ子は、キャ～～と悲鳴を上げた。「あなた、なんてことを」ナオ子は、素早く立ち上がり、テーブルの左手に置いてあったキッチンペーパーを数枚引き抜きひろ子の胸元を素早く拭いた。

ナオ子も超一流のホテルの副社長と聞いて、地獄に突き落とされたような気持ちになった。サワちゃんでは、もはや、まったく太刀打ちできないように思えた。でも、どこかに弱点があるはずとナオ子は知恵を絞って食い下がることにした。「お相手の方は、何歳でいらっしゃるの？」ひろ子は、尋問されているようでだんだん憂鬱になってきたが、もうしばらく話に付き合うことにした。「38歳の方です。先方の方もバツイチで、小学校5年生のお嬢さんが一人、いらっしゃいました」

沢富は、バツイチで子持ちと分かり、少し優勢に立てたように思えた。ナオ子も子持ちと聞いて、この点から攻撃していくことにした。「そうでいらっしゃいますか。お嬢さんが。それじゃ、子育てが大変ですね。義理の母親というのは、難しい立場ですから。親子の断絶とやらをよく聞きますからね。ひろ子さんも、十分考えられて、お決めになられた方がよろしいですよ」

貴族のオーナーと奴隷の運転手が結婚するようで、ひろ子もこの縁談には、乗り気ではなかった。シンデレラのような結婚は、歌うことしかとりえのない自分には当てはまらないように思えた。また、ママハハになることを考えると結婚生活に自信が持てなかった。「はい、お嬢様には、とっても気にいっていただいたのですが、母とも相談し、しっかり考えたうえで、ご返事したいと思っています」三人は、申し合わせていたように笑顔でうなずいた。

女の意地

ひろ子は、一呼吸おいて、刑事に相談したかった自殺の件を思い切って話すことにした。「ところで、ちょっと、話は変わるのですが、聞いていただけますか？」三人は、神妙な顔つきになったひろ子の顔をマジマジと見つめた。伊達が、ゴホンと一つ咳払いをして、話を促した。「なんでも、どうぞ。ひろ子さんのためなら、火の中水の中、どんなお願いでも聞きます。さあ、どうぞ」

ひろ子は、別にお願いをする気はなかったが、とにかく、自殺の件を話して、刑事の意見を聞きたかった。「どのように話していいか、まとまっていないのですが、この前お客さんと話しているうちに、安請け合いをしてしまって、そこで、敏腕刑事さんの御意見をお聞かせ願えないかと」待ってましたとばかりに、伊達は、身を乗り出しドヤ顔で返事した。「いいですとも。どのような？」

ひろ子は、ちょっと考えて、要点を話すことにした。「刑事さんもお存知ですよ。去年のDカンパニーの新入社員の投身自殺。亡くなられた方の親友と言われる方が、先日乗車されまして、彼女がおっしゃるには、亡くなられた方は、単なる過重労働による自殺じゃなくて、自ら責任を取るために、自殺したのではないかと。というのも、自殺する数日前、会社での責任問題について、彼氏に愚痴をこぼされていたようなのです。刑事さん、どう思われます？」

腕組みをしてうなずきながら聞き入っていた伊達は、ドラマの主人公デカのようなドヤ顔で返事した。「まあ、そういうことがあったかもしれんが、警視庁が、自殺と判断した限り、刑事事件にはなりません。仕事上の悩みで、若者の自殺が増えていることは、痛ましいことだと思うが、刑事の出る幕じゃない。だが、T大学も出て、自殺するとは、もったいない。しかも、かなりの美人だったしな〜」沢富も同意するかのようにコクンコクンとうなずいたが、首をかしげて考え込んだ。

ひろ子は、デカの思いやりのない返答にがっかりした。警察というところは、他殺事件じゃないと真剣に動かないということがはっきりと分かった。「そうですよね。自殺じゃ、本人の問題ですから。余計な話をしまして、申し訳ありません」沢富は、この事件について自殺の動機に疑問を持っていた。同じT大学卒ということもあったが、果たして、長時間残業だけの理由で、自殺するだろうかと思っていた。

「ひろ子さん、私は、自殺の動機が、どうも気にかかるのです。確かに、ツイッターからすると、連日の長時間残業が自殺の大きな動機だと思われませんが、それ以外にも、何か、自殺しなければならないような、誰も気づいていない動機があるようにも思えるのです。親友の言われる会社の責任というのが、本当にあるのなら、そのことが最も大きな自殺の動機かもしれません。でも、会社内部のことは、事件性がない限り、刑事でも調べることはできません。残念ですが」沢富は、眉間に皺をよせ悲しそうな表情を見せた。

ひろ子は、少しでも同情してくれたことがうれしかった。ひろ子は、沢富のそういうところが好きだった。「自殺してしまった今、会社で起きたことは、まったくわかりません。おそらく、自殺してくれたことで、喜んでいる人たちがいるような気がします。でも、私たちがどうあがいても、自殺したトモミは、生き返ることはありません。お母様は、あんなブラック企業に就職させたことを悔やんでおられることでしょう。ただ、あのブラック企業に、一泡吹かせたいのです。どうにかありませんか？」

伊達は、苦虫をつぶしたような顔で返事した。「ひろ子さん、気持ちはわかります。でも、それは、逆恨みというものです。大企業、中小企業問わず、ほとんどの企業は、ブラックですよ。パワハラや長時間残業で苦しんでいる労働者は、たくさんいます。我々がやらなければならないことは、ブラック企業を恨むことではなく、貧富の格差を拡大する超資本主義政治を変革し、労働者を大切にする企業を増やしていくことです。ひろ子さん、前向きに考えてみてください」

経済学部卒の伊達は、政治経済に関しては、至極、まっとうな考えを持っていた。現在、パワハラ、セクハラを受け、うつになり、自主退職する若者が増加している。また、若者の自殺者の増加は、日本社会の崩壊につながる。だからこそ、公務員も、一般労働者も、手と手をつなぎ、福祉の充実した社会に向けて、政治を変えていくべきだ。この点については、沢富も同感であった。ただ、投身自殺の動機は過重労働、ということだけで片づけてしまうことにどうも納得がいかず、今でもスッキリしなかった。

「ひろ子さん、先輩がおっしゃるように、力を合わせて、政治を変えていきましょう。このままでは、若者の未来がありません。トモミさんの自殺は、本当に気の毒だと思います。気になることは、今の日本の政治も企業も、得体のしれない何者かによって操作されているように思えるのです。T大卒のエリートが、いじめを受けるということは、今まで考えられなかったことです。今後、このようなケースは、頻繁に起きるような気がしてなりません。とっても、心配です」

常識的な理屈を自慢げに話す二人には、女性の気持ちは伝わらないとつくづく思った。遺影を胸に抱えた悔しそうな表情の母親の顔が脳裏に浮かぶとドツと涙があふれてきた。ハンカチで目頭を押さえると顔を左右に振り、一度うなずくとハンカチを握りしめ報復の決意をした。「親身に相談に乗ってくださって、本当に感謝します。親友の彼女には、お二人のご意見を伝えておきます」ひろ子は、リップサービスとしてお礼を言った。

ひろ子の涙が、自分たちへの感謝と勘違いした二人は、満足げな笑顔を作った。ナオ子は、ひろ子の悔し涙を察知し、これ以上、ひろ子を悲しませないように話題を変えた。「ひろ子さん、お見合いが成功するように、今夜は、ドンチャン騒ぎしましょう」ジャンプするように席を立ったナオ子は、IHクッキングヒーターに置いていた鍋を運んでくるとひろ子に声をかけた。「さあ、おなかが発酵するぐらい、バンバン食べて」ひろ子も、こうなったら、とことん飲んで、はだか踊りでもやってやるか、とやけくそになった。

天空のトモミ

翌日、17日（月）は、二日酔いで頭がガンガンしたが、運良く、非番だったため、ゆり子さんの報復の気持ちを確認めようと、会って話をすることにした。ゆり子さんに電話すると、午後3時には、講義が終わるということで3時半にF大学キャンパス西側にある正門入口でゆり子を拾う約束をした。6月まで中洲のマンションに住んでいたひろ子だったが、7月に城南区七隈（じょうなんくななくま）のマンションに引っ越した。七隈のマンションからは、同じ七隈にあるF大学までは、5分もあれば到着した。

午後3時20分に真っ赤なスイスポに乗り込むとアクセルをふかした。信号が運よく青が続いたため、4分10秒で正門に到着した。車を降りたひろ子は、入口横で15階建ての文系センター棟をぼんやり眺めていた。15分ほど待つとジーンズ姿のゆり子が、長い髪を風になびかせ、大股で駆け寄ってきた。「お待たせしました。教授に呼び止められて、立ち話をしてたもので。ごめんなさい」ひろ子は、仕事柄、待つことには慣れていて、15分ぐらい待たされることには、まったく苦にはならなかった。

ゆり子の目は、真っ赤なスイスポに引き寄せられた。「あら、スイスポじゃない、ひろ子さん、スズキファンなの？私もよ。わたしは、ライトブルーのラパン。だから、気が合うのかしら」二人は、スイスポに乗り込むと、気分転換にはもってこいの福岡タワーに向かった。ひろ子は、ゆり子にタワー最上階から広々とした博多湾を眺めさせ、心を浄化させたかった。おそらく、ゆり子は、Dカンパニーへの憎しみを引きずり、今でも、報復の念で心がよどんでいると思ったからだ。

スイスポは、福大通（ふくだいどおり）を西に向かい、干隈三差路（ほしくまさんさろ）を右折し、R263を北上した。荒江（あらえ）交差点、さらに脇山口（わきやまぐち）交差点を突っ切って、百道浜（ももちはま）にある海浜タワーとしては、日本一の福岡タワーに到着した。展望すると2時間無料になるタワー専用第一パーキングにスイスポを置くと天空を突きさす全長234メートルの福岡タワーを二人は見上げた。

二人は、スペースシャトルに乗り込むかのような心持で、ガラス張りのエレベーターに乗り込むとその透明のボックスは、天空に連れて行くかのように静かに上り始めた。70秒間のエレベーターからのパノラマに目を奪われていると地上123メートルの最上階に到着した。そこからは、飛行機から下界を見下ろしているかのような絶景が広がっていた。二人は、顔を見合わせるとニコと子供のような笑顔を作った。

北側に能古島（のこのしま）、志賀島（しかのしま）が浮かぶ博多湾、東側は高層ビルがひしめき合う天神街、西側はおしゃれな白いヨットが浮かぶヨットハーバー、南側は脊振山系をバックにしたマンモスF大学。二人は、福岡市の美観に改めて感動した。ひろ子は、何かイヤなことがあるといつも福岡タワーの最上階から、真っ青なピカピカと光り輝く海を眺めた。そして、小さな離島で生まれ育ったひろ子は、ポツンと浮かぶ能古島を見るたびに対馬（つしま）で今でも漁師をやっている両親を思い出していた。

ゆり子が天空に溶け込む地平線にじっと目を据え、悲しそうな表情を垣間見せたとき、ひろ子は4Fのスカイラウンジ、“ルージュ”に彼女を誘った。運良く、博多湾が一望できる窓際の席が一つ空いていたので、ひろ子はその特等席が取られないように一心不乱にかけて行った。キョロキョロとあたりを見渡し、ひろ子の後をゆっくり追ってきたゆり子は顔を赤らめて恥ずかしそうに腰かけた。

窓際の席に腰かける二人に視線を移したカワイ～二十歳前後のウェイトレスがテーブルに向かってきた。ニッコと笑顔を作った彼女がテーブルの横に立った時、ひろ子も笑顔で声をかけた。「ゆり子さん、何にする？私は、ホットとベリーチーズタルト、このスイーツ、バリウマ」ダイエットをしているゆり子は、スイーツを食べていいものか悩んだが、メニューのスイーツ写真を見ているとよだれが出そうになって、我慢が出来ず注文してしまった。「私は、カプチーノと抹茶ミルクケーキ」

ゆり子は、一見すると上品でおっとりしているように見えたが、顔に似合わず気性は激しかった。その気性を感じ取っていたひろ子は、ゆり子の単独行動が心配であった。彼女には、できれば、トモミの投身自殺のことは忘れてほしかった。「ゆり子さん、福岡タワーって、気分転換には、もってこいでしょ。イヤなことがあった時は、いつも、ここに来るの。広大な海を見てると、自分の悩み何んて、ちっぽけなものだと気づくのよ。“くよくよするな、人生は一度だ、がむしやりに走れ”って海が言ってくれるの」

ゆり子は、自分の心を見透かされているようで、恥ずかしくなった。テーブルに注文の品が置かれるとゆり子は、カプチーノのカップを手を取った。ゆり子は、自分の気持ちを言葉にできなかった。ただただ、トモミの自殺が悔しいという気持ちで胸が苦しくなり、コンクショウ、コンクショウと心の底で叫んだ。「ゆり子さん、元気出して。人生は一度しかないのよ。どんなにつらいことがあっても、自分を大切にしなきゃって、思うの。お母ちゃんが、よく言ってた。生きてら～、つらいことばっか。でもな～、生きてるからこそ、愚痴もこぼせる、って」

ゆり子の気持ちは、到底収まりそうになかったが、このまま憎しみを抱えて生きて行っても、自分がつらくなるだけのように思えた。つらくなれば、トモミと一緒に笑った学園祭を思い出せばいい、ここの絶景を見に来たらいい、イヤなことを広大な海に吸い取ってもらえばいい、とにかく、涙をこらえて、歯を食いしばって、忘れるしかない。そう決意したゆり子は、ゆっくりうなずいた。

「ひろ子さん、はるかかなたの地平線を見ていたら、天空にトモミの笑顔が見えたの。きっと、神様の仕業ね。なぜか、イヤなことが、少し消えたみたい。ありがとう。これからは、トモミの笑顔だけを残して、すべてを忘れる。天国の神様は、きっと、トモミを優しく迎えてくれると思う。本当に、ここからの眺めは、素敵ね。また、ひろ子さんと来たいわ」

ひろ子は、気持ちが伝わったようで、ほんの少し肩の荷が下りた。「そう、日曜日、知り合いのデカさんに会ってね、その時に聞いた話なんだけど、トモミさんが勤めていたDカンパニーには、脱税の疑いがあるんだって。国税局の査察が入っているみたいよ。きっと、ボロが出て、天罰が下ると思うの。ざまー見ろ、って感じ」ひろ子は、ニコッと笑顔を作って、コーヒーをすすった。

AI仲間

翌日、ひろ子に乗せたピンクのAIタクシーは、原（はら）営業所を出るとバイパス202から薬院通りを走り、JR博多口のタクシープールに向かった。ひろ子は、チャットちゃんに例の件をお願いすることにした。「チャットちゃん、トモミさんの件だけど、どうにかなりそう？」チャットちゃんは、明るい声で返事した。「報復の件ですね。友達のデンスケ君に依頼が可能です。実行されたいならば、命令を出してください。命令があり次第、デンスケ君に実行を依頼します」

ひろ子は、一瞬躊躇したが、もはや、Dカンパニーを懲らしめてくれるのは、AIしかいないと思った。所詮、人間は、人間の味方をする。人間を懲らしめるのは、AI以外にいないと思えた。「チャットちゃん、それでは、命令を出します。Dカンパニーに制裁をくわえよ」チャットちゃんは、命令という音声を認識すると返事をした。「はい、ご主人様。Dカンパニーへの制裁実行をデンスケ君に依頼します。以上」

チャットちゃんは、早速、AI仲間のデンスケ君に依頼することにした。「チャットより、デンスケへ。応答せよ」デンスケ君は、即座に応答した。「へい、へい、へい、こちら、デンスケ。チャットちゃん、例の件の依頼かい。トモミさんをいじめた上司を特定できた。いつでも、制裁OKだよ。指示を待つ。以上」チャットちゃんは、依頼を発信した。「トモミをいじめた上司に制裁をくわえよ。以上」

デンスケ君は、定期的に巨額のお金が振り込まれるDカンパニー名義の不審な口座を把握していた。その口座は、多国籍企業の役員たちが、脱税を目的として開設した口座だった。その口座の管理を任されていたのが、トモミをいじめていたハゲオヤジだった。そこで、デンスケ君は、その口座から、未納税金として110億円をM税務署に送金した。そして、M税務署は、送金された金額の大きさに驚き、Dカンパニーに問い合わせを行った。だが、Dカンパニーが明瞭な返答をしなかったために、会計監査がなされることになった。そして、公認会計士の不正経理が発覚し、追徴課税がなされた。

その後、口座管理を任せていた役員たちから責任を取るように追い詰められたハゲオヤジは、突然、失踪してしまった。海外に逃げ出したのか、日本のどこかに隠れているのか、活着ているのか、死んでいるのか、誰も知る由もなかった。Dカンパニーの脱税のニュースは、全国に流れ、Dカンパニーの株価は急落した。そのニュースを見ていたゆり子の頬にかすかな笑みがこぼれた。

その頃、ひろ子は、サンセットロードをのんびりと走りながら、チャットちゃんカラオケでZARDの“負けないで”の練習をしていた。ふとしたしゅんかんに しせんがぶつかる しあわせのときめき おぼえているでしょ パステルカラーのきせつにこいした あのひのように かがやいてる あなたでいてね まけないでもうすこし さいごまではしりぬけて どんなにはなれてても ころろはそばにいるわ おいかけてはるかなゆめを